春風の中小企業をたどって 3

tadotte@asahi.com

ろうの人と聴者の懸け橋に

障がい者の法定雇用率2％をクリアする大企業が増えてきた。でも、離職に追い込まれる障がい者がいる。

例えば、生まれつき耳が聞こえないか、生まれてすぐ聴力を失った「ろう」の人の場合、こんなことが起こる。

「仕事を終わらせる」と書くべきを、「仕事が終わらせる」と書く。「水を流して下さい」を「水を流れて下さい」。使えないな、と冷たい視線を浴び、会社にいられなくなる。

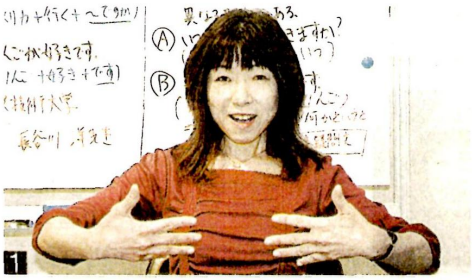
そんな話を、鈴木隆子（51）はいくつも聞いてきた。東京都杉並区にある「テンダー手話・日本語教室」の経営者である。

「日本語と日本手話の文法が違うから起こる悲劇です」

ろうの人たちが使う「日本手話」は、日本語とは別の言語体系を持つ。日本語の単語と手の動きを対応させた「日本語対応手話」とも異なる。

鈴木は日本語教師であり、政見放送に登場する手話通訳士でもある。「ろうの人に日本語の文法を、聴者に手話を学んでもらい、お互いを理解してもらう。天職だと思っています」

教室で授業を見た。鈴木は笑い続けていた。でも、インタビューをしていくと表情がくもる。かばんから一枚の紙を取り出した。



1 鈴木さんに手話を教わる。下から暖かい空気が上がってくるのを、両手で2回。それが「春」

2 両手をななめにゆらゆらと2回 **風**

3 「の」は手話では表しません。「中」はこれ **中**

4 左人さし指を右人さし指と中指ではさむ **小**

5 2本指を頭の横で交互に2回動かす **企業**

医師の診断書だった。「PTSD（心的外傷後ストレス障害）によるフラッシュバック」とあった。

「父は母に暴力をふるい、私はいつも警察を呼んでいました。20年前、私のおなかに息子がいたとき、父に殴り倒されました。かばってくれた母に、父は言いました。こいつの子なんか死んでも構わん、と」

鈴木は、父に似た人を見ただけで暴力の光景が浮かび、号泣するようになった。「この診断書は、号泣していても気にしないで下さい、と説明するお守りです」

鈴木が日本語教師や手話通訳士になった理由は、やりがいを求めたから。大学を出て入社した有名企業の男たちの論理に幻滅し、「会社員はこりごり、資格を取ろう」と思ったのだ。

数年前のこと。鈴木は手話関連のNPOにいた。机を並べていたろうの男性2人が、日本語としてはおかしな文章を書いた。障がい者はだめだ、との声が上がる。聞こえないはずの2人から、鈴木は手話で言われた。「悔しい」

鈴木は思った。父を選べなかった自分と、ろうという現実以外を選べなかった彼らは一緒だ。ろうの人と聴者の懸け橋になろう。

鈴木は、ろうの人たちに日本語の文法を教える出張講座を始めた。教室開業は2011年7月。教室名の「テンダー」は、プレスリーの「ラブ・ミー・テンダー」から。優しく愛されなかった母が好きな曲だった。

翌12年4月、うつに苦しんだ母が逝く。満開の桜に「きれいね」とつぶやき、「ごめんね」と娘に謝って。

3年たった今年4月。新社会人になったろうの若者が「日本語に自信がない」と駆けこんで来るなど、教室はにぎやかだ。

（文と写真・中島隆）

＝敬称略